

## RCIC のこれまでと今後の展望から見る

### IAMAS as seen by the RCIC

入江 経一

IRIE Keiichi

#### 1. CMC 時代から RCIC ができるまで

私が RCIC（産業文化研究センター）にかかわって今年で 2 年半になる。RCIC は IAMAS の「産業・地域との連携」の窓口として 2010 年に活動を始めたが、このわずかな間に、IAMAS を取り巻く環境や社会状況は一変した。アカデミーの廃止、スタジオ制から領域制へなど、IAMAS は新たな体制に移行したし、RCIC の活動も状況の中で変化し、今後に変容しないわけにはいかないだろう。IAMAS という大きな活動の中にあっては RCIC はそのデティールに過ぎないかもしれないが、部分に生じる変化は大きな社会や IAMAS を取り巻く環境の変化とも繋がっている。RCIC での短い経験をスケッチしておくことは、さまざまな兆候から現出してくる時代を見据えようとする人にとっては、何らかの足しになるかもしれない。そこで、RCIC の立場で経験した IAMAS と現実の社会との関係、その夢や理念と現実の間に横たわる問題などについて、きわめて個人的な経験ではあるがレポートすることにした。

IAMAS に CMC (Center for Media Culture) (メディア文化センター) が生まれたのは開学時の 2000 年のことである。設置の目的は (記憶と想像を交えて) 坂根先生が世界中を回って作り上げたネットワークを活かし、海外のメディア文化のセンター (アルスエレクトロニカセンター、ZKM など) や大学などとの連携、国内のメディア文化拠点である ICC (東京)、せんだいメディアテーク、山口情報芸術センター (YCAM) などとの連携を図り、IAMAS の研究活動の成果を広めるとともに、イベント開催、出版などを企画するというものであったと思う。

当時の IAMAS はメディアアートを主軸とした活動の真ただ中にあった。開学以来のきわめて短い期間の間に、世界中から高く評価される成果を挙げ得たのは、誕生して間もないデジタルテクノロジーをいち早く随意に使いこなして、新たな作品 (工学系なら制作物) を生み出す時代の先端を走る頭脳が、ここ IAMAS に結集したことと、専門分野に分かれた彼らが相互に協力し合う豊かな体制があり、そしてそれを社会へと投げ返す強いネットワークが周囲との間に存在したからだ。それらの拠点は、ときに時代の脚光をあびるステージでもあり、また相互の成果の交流の場としてにぎわい、全く新しい体験をもたらす作品群が次々に現れては人々の注目を集め、まさにひとつの時代の象徴であった。アートとテクノロジーにまたがる活動が爆発的に膨張し人々から注目されていた時代にあって、IAMAS が成果を恒常的に産出するだけでなく、その成果をアーカイブし他との連携や刺激を通じてさらに新たな産出をめざすための、いいかえれば IAMAS が社会的文化的な機能を果たしてゆく拠り所という熱い期待が、CMC には込められていたように思う。

けれども時代は大きく変わり始めていた。新たなテクノロジーは急速に産業化して社会に浸透し、芸術はいつもながら商業主義とマスメディアによって大衆化される。メディアアートという誕生まもないニッチな砦もまた、テクノロジーとコマーシャルイズムが社会を新たに統合する波の中では、その波に依存しながら共同体の夢を夢見るはかない存在だった。芸術と科学の融合という理念はいったい何か。真剣な検証を怠れば、現実がそれを追い抜くスピードはどんどん上がっていた。

横山学長が CMC を受け継いだときには、すでに CMC は重荷になりはじめていた。CMC は予算も担当者もその目的に十分とは言えず、当初のビジョンは前述のように変化する社会と IAMAS を取巻く環境のなかで揺らいでいた。追い打ちをかけるように、世界的経済の悪化によりメディアアートを振興してきた拠点は、必要最小限の規模にまでしばみ始める。岐阜県が巨額の費用をつぎ込んで整備したソフトピア地区（情報化社会を先導する産業基盤）、各務原 VR テクノジャパン（科学技術の研究開発拠点）、IAMAS（教育・文化・産業振興拠点）という IT 時代へのかけ橋となるべき三種の神器は、財政悪化の中でまさに存続の危機を迎えていた。CMC は大きな野望に代わって現実的なルーティンとしての出版（紀要、IAMAS 叢書など）、イベント・展覧会の企画運営（おおがきビエンナーレ、各種展覧会）を運営し、また広報活動（学校案内等の印刷物、WEB の管理）を行っていた。

そして 2010 年 4 月、IAMAS の存続のためのアカデミー廃止、教員数削減を含む大きな転機が訪れる。CMC（メディア文化センター）はその使命を終え、新たに県との了解のなかでうまれたのが RCIC（産業文化研究センター）である。

この転換は、これまでの IAMAS の活動方針の見直し、すなわち科学と芸術の融合というスローガンに代わって産業と地域との連携という緊急のタスクを、財政の逼迫と企業活動の停滞という問題を抱えた県から求められたものだった。その根拠は次の事実である。IAMAS は県の情報産業課に所属する一機関である。そして IAMAS 設置の趣旨は、県内の IT 産業を育成すると同時にものづくり拠点となることであった。IAMAS がいくら高い評価を得て優れた人材を国内外へ輩出しているとはいえ、それが県の産業振興に結びついていないならば、設置の目的は果たされていないということになる。たしかに教員も学生も、その目線は岐阜県（の産業）という枠にとどまらず、日本全国や海外から評価される表現活動を指向していたことは事実だったし、CMC の目線と同様でもあった。教育事業とは目先の利益を追うものではなく、将来を見据えて次世代の国家をつくる人間を育てるものだ、という理想を述べる余裕など無かった。このとき県は再生にむけてあらゆる努力をしていたし、またそのためには必要に応じてあらゆる縮小を断行していた。

IAMAS がまったく地域を顧みていなかったわけではない。工学系の教員によって地元の中小製造業、金属工業団地との連携や地域連携講座など、地道な連携プログラムが行われていた。しかし卒業生が県内企業へ就職する率はとうてい県議員の満足する数字ではなかったし、それらの連携で産業が活気を呈するとはいえなかった。

このような状況で運営予算も大幅に減少するなかで、IAMAS の研究成果を県の産業経済へと結び付ける窓口としての RCIC が作られたのだ。産学連携のインターフェイスである。窓口業務のほかに、IAMAS の広報活動やイベントの企画運営なども CMC からそのまま RCIC へと引き継がれた。

IAMAS の教育研究活動もこうした変化と無関係ではない。産業への貢献を求められたとしても、それだけに視野を閉ざすわけにはいかない。IAMAS 本来のあり方を見直し、運営上のいくつかの問題と向き合い、必要な改革を行わなくてはならなかった。建学の理念である科学と芸術の融合をどのように今後の教育と研究に継承するか、メディアアートにのみ偏ることなくデザイン領域や工学的な研究をバランスよく行う体制とはどんなものか、個人の業績を重視するアカデミズムより実践的なプロジェクトの成果を重視しようではないか、今の時代と社会の中で IAMAS がリードするものとは何か、毎年決まったカリキュラムを繰り返すのではなくこれから求められるメディアの総合学とは何か、新たな社会的問題へと視野をひろげないで IAMAS の存在意義はあるのか、などの真摯な問いを教員全員が集まり話あった。

そうしたことを経た現在の IAMAS の実践は、以前にもまして強化されている。クライシスは確かに禍根を残したが、鍛えもしたのだ。メディアアートも、熱風のような時代からより思索的になり、現実の社会、人間の知覚や現実に関心をひろげている。それらは a.Labo で各プレゼンテーションで公開されている。また社会を対象とすることが自明であるデザインや工学的な研究でも IAMAS らしい視点で産業や社会を見すえて、新たな意味を提案するデザインやプロダクツの制作や、それらをコミュニティの生成へと結び付けてゆく挑戦が続いている。具体的には本紀要に掲載されている小林茂先生の論をみれば良い。社会という言葉がいずれの活動領域においてもクローズアップされるようになった。制作を通じて創造者と受容者との関係をインタラクティブに構築することは当初からの IAMAS のお家芸的なものだったが、そこにより広範な問題意識が導入されたといってもよい。

RCIC については、公式には次のように紹介されている。センターの名称およびこれらの文言の中に、県の産業意向に対して「文化」という文字が残ったのは、準備にかかわった関口学長（当時研究科長）の強いこだわりだった。

産業文化研究センター（Research Center for Industrial Culture、通称 RCIC）は平成 22 年度より開設された大学院大学の附置機関です。IAMAS がもつ情報科学技術と地域文化研究の成果を用いて、広く産業界と連携して研究ならびに地域貢献を行なう研究機関であり、単なる産業連携にとどまらず、新しい産業や文化事業の立ち上げなどにも積極的に提言・協力をして、「産業文化」という新たなジャンルを地域レベルで構築することを目的としています。

前身はメディア文化センター（Center for Media Culture、通称 CMC）として IAMAS のさまざまな活動を学校の外へとつなぐインターフェイスとしての役割を果たしていました。新センター（RCIC）は、CMC の活動を継続し、より「産業」と「地域」へのまなざしを強化した研究機関として機能します。

## 2. RCIC のあゆみ

RCIC の産業・地域連携について手短かに振りかえる。前述のとおり、その目的は IAMAS と「産業」「地域」の連携を生み産業の育成や支援を図るものである。IAMAS の 1 階にあった CMC の部屋がそのまま RCIC になった。

#### 2010 年度 RCIC の職員構成と役割

センター長：小林昌廣→入江経一

(年度半ばのビエンナーレ開催前に交代、ビエンナーレの企画は小林先生、運営は入江)

研究員：岡本ゆかり (広報担当、各種イベントの運営管理)

河村陽介 (イベント、展示等の運営、WEB の担当)

難波田隆雄 (企業連携担当)

#### 2011 年度 RCIC の職員構成と役割

センター長：入江経一

研究員：

主任 伊東正人 (企業連携担当)

岡本ゆかり (広報担当、各種イベントの運営管理)

河村陽介 (イベント、展示等の運営、WEB の担当)

緊急雇用スタッフ：

伊藤友哉 (デザイン)

鈴木光 (アーカイブ、撮影)

高橋あゆみ (デザイン)

八嶋有司 ( イベント、展示等の運営)

#### 2012 年度 RCIC の職員構成と役割

センター長：入江経一

担当教員：金山智子

研究員：岡本ゆかり (広報担当、各種イベントの運営管理)

藤原広美 (企業連携担当)

八嶋有司 (イベント、展示等の運営、WEB の担当)

2010 年からソフトピアジャパン内に「RCIC 分室」が設置され、展示スペースと会議室を備えた。ここではソフトピアの職員が常駐して企業の訪問などを受付け、打ち合わせや会議を行い、展示スペースではワークショップ、レクチャー、展覧会などを今も行なっている。

### 3. モバイルカフェ、そして i.Labo

CMC から RCIC が生まれるまで、IAMAS はどの年度も忘れることができない重要な活動をしてきたが、県という基盤が抱えたクライシスと直結して 2010 年前後に IAMAS がその根幹にかかわる危機を迎えたことは前章で述べた。それに対して県も IAMAS も間髪をいれずに立ち向かった結果、わずか 2 年ほどで状況は一変する。IAMAS 全員の努力だけでなく様々な要因が絡み合った結果ではあるが、その回復は驚くべきことだと思う。経済が立て直されたとはまだはいかないまでも県はきわめて前向きの姿勢を取り戻したし、IAMAS は存在価値を再び高く評価されるように、おそらく以前にもまして、なったのである。そこにいたる努力や試みを、RCIC の立場から振り返ってみる。

2010 年から、産業情報課からの依頼で「i. Labo」という名称の公開フォーラムが始まった。

現在もドリームコアの2階メッセにて月1回開催されているが、目ざすところは当初とは変化している。始まった当初の i. Labo は RCIC の活動をわかりやすい形で外部に公開する出店のようなものであり、連携というパフォーマンスの場であった。なぜ必要とされたのか。

当時、IAMAS の赤松先生の指導により始まった「モバイルカフェ」が大変に好評を呈していた。毎回ドリームコアの空間は、iPhone のアプリ開発に熱心な参加者（IAMAS 関係者を中心に地域の開発関係者達）のプレゼンテーションと議論で白熱していたのだ。一方、岐阜県の基幹産業でもある中小の製造業は受注の激減にあえぎ、景気後退に追い打ちをかけられ、新たな製品開発もままならず、四面楚歌のような状況だった。情報産業課がモバイルカフェの熱気をこうした製造業へと伝導させたい、と考えるのは不思議ではない。そこで製造業むけのフォーラムを設けて、最初は iPhone 関連のアクセサリーの商品開発をしたいというのが私への依頼内容だった。もの作りのヒントから悩みの相談まで、とにかく業者も地域住民も集まって IAMAS 側が何らかのアイデアや技術を提供しながら、賑わいを呈する場を作ろうということになり、i. Labo は始まった。i とはインターフェイスというような意味だった。その活動は外部に延長された IAMAS であり、内部で教育と研究を行う IAMAS との間にあるのが RCIC だったといっている。

モバイルカフェとはいえば、その後熱気はますます広がって、やがて岐阜県のソフトピア地区に形成された iPhone アプリ開発者のノードは全国から注目を集め、短期間のうちに東北をはじめ各地にまたがるスマートフォンアプリ開発者の交流が形成されると同時に、アプリ開発の先駆的な地として岐阜県のイメージが定着し、さらに震災後にはソフトピア地区に移住する IT 企業でにぎわうことになる。

このような中で IAMAS に企業からの注文が集まってきた。企業から RCIC へ直接よせられた依頼もあれば、足しげく企業を回って（難波田氏の営業）得た IAMAS への依頼もあり、また i. Labo での話合いでうけた依頼もあった。RCIC はこれらを学内に紹介し、対応できる先生を探したり、RCIC 自身で請け負った。注文内容はものづくりやそれに関連した指導などが多かったが、やがてまちづくりへの支援にまで発展した。それらのプロセスや成果は順次 i. Labo で公開した。

#### 4. うまくいった美濃のまちづくり

2010 年の i. Labo の大きな仕事としては、美濃の商工会議所からきた「美濃のまちづくり」がある。美濃からソフトピアジャパンへ支援の話が持ちかけられ、情報産業課にその話が伝わり、その結果、プロジェクト全体は情報産業課が主宰し、ソフトピアジャパンが運営、実質的な提案を IAMAS が行うということになった。当初の注文（商工会議所）はセカイカメラのようなモバイルシステムを観光目的で美濃に導入し、韓国語や中国語にも対応させたい、という限定的な依頼だったが、歴史的街区を有する美濃をよくリサーチした上で、町のコミュニティを活性化するような広い視点のでもまちづくりを趣旨にして活動を始めた。大垣と美濃（3回）で i. Labo を開催し、ここで多数の美濃の関係者も集まって話し合い、いくつかの提案も行った。また FACEBOOK を活用しながら美濃の人々と広域の人々とのつながりも生まれた。これがきっかけとなって、今も美濃のコミュニティでは活発なイベントや勉強会が続

いている。

幸いなことに美濃市からはこれらの IAMAS の支援が評価され、美濃市長からも 2012 年以降も協力関係がつづくように要請された。2013 年には（あくまで予定）美濃市内に IAMAS 拠点を設けて、さらに魅力ある地域活動を構想している。これらの美濃のまちづくりは、IAMAS の地域連携として成功している例にあげてもよいだろう。

まちづくりのこうした取り組みは他の市町からも関心と呼び（高山、白川で i.Labo を開催）、2011 年からは恵那市岩村町で町の人々と一緒にコミュニティデザインを話し合い、今も活動が続いている。

プロジェクトの体制としていつかの組織が相互に協力しあうことは、なかなか困難なものであることも、経験した。2011 年以降、ソフトピアジャパンはある理由によりこれらのプロジェクトから手を引いている。また 2012 年以降、岩村町のまちづくりからは情報産業課も外れて IAMAS 単独のプロジェクトとして行われている。

## 5. ひと筋縄ではいかない連携のむずかしさ

うまくいかなかった例からどのような問題があったかを知ることが、今後の活動に貴重なヒントを与えるので、あえて紹介する。

ある企業がプレゼンテーション技術を習得したいというので、企業のデザイン担当の人に分室にて半年ほど毎月講習を行った。その成果もあり会社はその後のコンペに勝ちいくつかの受注を得たのだが、そのデザイナーは意見の相違などでその会社を辞めてしまい、会社としては元の木阿弥、古い方法のプレゼンテーションへと戻ってしまった。指導の努力も会社の意欲も徒労にならないためには何が必要だろうか。

こちらの例は 2 年間をかけた連携で起こったことである。ある会社が金属部品の加工メーカーからの脱却をはかるために新たな事業（カーボンファイバー事業）への構想を立て、その技術の導入を目的として自転車を開発することになった。そこで自転車の車体をはじめとする全体デザインを RCIC が担当することになり、企業スタッフに制作の指導をしながら一緒にプロトタイプを制作し、企業側はそれを製品化し発売も決まった。

けれども実際の作業が先行する中で、共同研究としての位置づけの了解ならびに契約が取られておらず（連携プロジェクトを運営するのはソフトピアジャパンの担当であった）、それが問題を生じた。企業側は自社の開発費は負担するがそれ以外の IAMAS 側への研究費などの負担は考えていなかった。IAMAS としても一方的に企業活動に奉仕するのでは意味がなく、研究の意義が何なのかは当然問われなくてはならない。それが次第に曖昧なものになって行った。結局、商品化された自転車に「Designed by IAMAS」の表示を入れて、連携のメリットとすることになった。しかし、車体のプロトタイプが出来上がった後、製品名やロゴマークのデザイン等については、IAMAS の意見を聞き入れられず当の会社によって同時に決定されたために、広報戦略を含めて総合的なデザインは明らかに質が落ち、「Designed by IAMAS」と表示することはできなかった。すぐれたコンセプトを具現化する高い水準のデザインとして Good design 賞を狙っていたが、残念な事に逃している。

これらのケースは企業側にも何らかの問題があったが、連携や共同研究の運営の進め方にも問題があった例である。

財団法人ソフトピアジャパンは、IAMAS の活動を運営面から補佐するという役割をはたすように、情報産業課から再三の要望があったにもかかわらず、2011 年の後半から IAMAS との関係性を断っている。それが本来の財団の仕事ではないという理由であった。こうした状況から、現在は IAMAS が自律的に連携の運営まで管理していかなければならない。

現在、RCIC では連携の情報には特に気を配り、情報の公開とプロセスの透明化をはかる努力をしている。

## 6. 2012 年の RCIC と IAMAS

広報委員会が出来たのは 2010 年だった。それまでは広報の基本的な枠組みからデザインまでの作業は RCIC が行っていたが、これ以降は広報委員会が企画からデザインまでを担当し、印刷など制作の管理を RCIC が行うという体制に変わった。IAMAS にとって重要な広報は、それを専門とする委員会を設けるべきとの考えからである。広報委員会は 2012 年に広報戦略委員会と名称を改めたが、基本的な考え方は変わらない。広報に関してはこの委員会と RCIC とは二人三脚のような状態で活動している。

2012 年の IAMAS の活動は新たに生まれた a, f, i の領域制（a-アート、f-テクノロジーとデザイン、i-地域や社会の中での実践）という体制、各 IAMAS Labo の開催、プロジェクトを全面に押し出した研究活動など、大きな挑戦から始まった。この 1 年の多様な実践の中から見えてきたのは、次のような IAMAS 像である。a 領域では今までのメディアアートの文脈に加えて、さらに社会的な問題や人間性の問題、新しい現実の提示などを広げている。f 領域ではものづくりやデザインにおいて時代に先駆けるプロトタイピングの実践や、研究者や企業を巻き込んでの新しいコミュニティ作りなどの挑戦をダイナミックにおこなってその成果を上げつつある。そして今年から加わった i 領域の社会的な活動がある。

i 領域の活動については新たに生まれたジャンルでもあり補足しておく。2012 年 IAMAS に社会学分野の金山智子先生（i 領域）が参加してからは、i 領域による地域やコミュニティを対象とする活動は以前にまして充実し、外部から依頼された活動ではなく自発的な提案にもとづくものになっている。（樽見鉄道プロジェクト、美濃、岩村でのまちづくり、小水力発電プロジェクトなど）

金山先生も私も RCIC の担当教員であり、且つコミュニティや地域を対象に実践的にデザインやアートを生かす活動をする i 領域に所属し、月一度の iLabo を開催している。このことは、学内の教員や学生との協働作業（i 領域）とそれを地域へと結びつける活動（RCIC）をシームレスに運営するという利点がある。領域と RCIC との切り分けが曖昧だとも言えるのだが、そのことがむしろスムーズな運営に利している。こうした利点を i 領域に限らずどの領域にも当てはめることができるかもしれない。領域の垣根を超えて RCIC を利用し、IAMAS と地域、産業、社会との間にシームレスな関係を作ることができるなら、むしろ対社会的には a, f, i の領域を強調する必要はないとも考えられる。（学内の教育研究環境は別として、つまりそこでは領域は有効性を持つ。）このことは、f 領域の小林（茂）先生が提案する今後の f 領域の方向性についての考察の中でも指摘されている。

これらの多方向にわたった活動を概観すると、IAMAS という小さな集団によるとは思えないほどの広がりをもっており、社会の多方面に広範な影響を与えうるだろうし、そうでなければならない。それを促進する役目が現在の RCIC だとも言えるのだが、ものづくりの支援やものづくりコミュニティの新たなかたちを f 領域が主軸となって作り上げて行くことは、今後の IAMAS の根幹となるはずであり、その活動と RCIC とはマージされより効果的に組織されてゆくべきだろう。その結果が、県が期待する産業と地域との連携をはるかに高い次元で実現するものでなくてはならないのは、勿論である。

## 7. CMC と RCIC の意義

RCIC は産業と地域への支援を目的として設置された。そして現在の IAMAS の活動は、産業のみならず文化領域においても、地域や社会へむかって開かれている。そうであれば、文化の拠点づくりを目ざしたかつての CMC の機能を、どこかが担うべきなのではないか。それは明らかに RCIC とは別の働きだというのがこの 1 年で得た印象である。新たな CMC 的機能をいかに構築できるだろうかと考えると、おそらく IAMAS 図書館を軸としてではないだろうか。現在の岐阜県で新しい文化的ノードの形成をつくるならば、IAMAS をおいては他では不可能だろう。a 領域が果たす役割は無論のこと大きいはずである。さらなる考察は IAMAS で他の研究者や先生方にもすすめてもらえればありがたい。

前述したような RCIC と領域間の新たなシームレスな環境作りもまた必須である。繰り返しになるが、テクノロジーを媒介にするものづくりやデザインを考えるイノベイティブな拠点づくりと、その周囲に新しいネットワークを築くことは、f 領域の活動を主軸に据え RCIC がその動きを延長、強化するだろう。RCIC はそこで再び機能変換することになるだろう。i 領域の活動もそこにリンクするはずである。i 領域はもう一方で a 領域ともリンクを張るだろう。こうして IAMAS の 3 つの領域が相互に働きあい、RCIC と CMC 的な文化拠点によってこれらの活動が社会化されていくなれば、長年にわたり試行錯誤してきた IAMAS の優れたかたちが見えてくるのではないだろうか。

芸術と科学の融合という理念は、単に二つの領域が交流すれば良いなどと云うことであるはずはない。もしそうであるならこの言葉はとうの昔に失効して大衆社会の中で消費されている。この理念に新たなかたち、活動形態だけでなく新たな思考と呼べるものを与えるのも IAMAS に求められた課題である。